

〔論文審査結果〕

論文提出者：ウスマノヴァ・ラリサ

審査対象論文：1898年から1950年代の北東アジアにおけるテュルク・タタール・ディアスポラ意識の変容過程についての歴史学的考察

(An Historical Account to the process of changing Türk-Tatar Diaspora
Consciousness in North East Asia between 1898 and the 1950s)

論文審査委員：宇野重昭教授、小松久男教授、貴志俊彦教授、井上治教授、江口真理子教授

【内 容】

本論文は、1898年から1950年代にかけて、北東アジアに移住したロシア系テュルク・タタール人に関して、コミュニティの歴史的・社会的な変化に注目しながら、彼らのアイデンティティとコミュニティの歴史社会学的な特徴づけをおこなうものである。とくに、1930年代、40年代、旧満洲に逃れたテュルク・タタール人ディアスポラをとりまく政治的、社会的状況を、当時奉天（現瀋陽）で発行されたアラビア文字のタタール語新聞『ミッリー・バイラク』をもとに分析したことは、本論文の特徴といえる。

本論文の構成は、序章、第1章から第5章、結論、そして資料4編からなる。おもな内容としては、1898年から1950年代におけるテュルク・タタール人コミュニティを5つの時期に分けて、彼らのアイデンティティの変化に注目するとともに、そのアイデンティティ形成に影響を与えた三人のディアスポラ・リーダー、すなわちイブラヒム、クルバンガリ、イスハキの思想を分析している。また、『ミッリー・バイラク』紙をもとに旧満洲を中心に日本、朝鮮、中華民国におけるコミュニティの内実についても詳細に記述している。さらに、『ミッリー・バイラク』紙の全記事リスト、同紙に登場したテュルク・タタール人の全人名リストなどを添付する。

本論文のアプローチは、近年発表された移民コミュニティ研究やディアスポラ論をもとに、アレクサンダー・ヴェント（Alexander Wendt）の政治学的な構成主義理論に依拠する。すなわち、ヴェントが指摘するように、国家利益は国家のアイデンティティや国際的規範から生まれるとの主張に基づき、ディアスポラが共通のアイデンティティによってホスト国との関係を形成すること、ディアスポラが国際政治のアクターとして政治的な影響力を与えることなどの仮説を強く意識している。こうした点が本論の分析に有効であるか否かについてはなお課題を残しながらも、当時のタタール語新聞をもとに、これまで研究史上の空白であった旧満洲のテュルク・タタール人の実態、アイデンティティ獲得のための努力、当時の政治権力とのかかわりについて歴史社会学的な分析を進めようと試みたことは評価に値する。

また、これまで、北東アジアにおけるテュルク・タタール人たちの実態理解については、日本外務省の外交記録や外事警察にもとづく状況分析が中心であり、タタール語新聞を通じてディアスポラの内なる視点から、それを取り巻く政治的社会的状況を把握する試みはほとんどなされてこなかった。本論文のように、テュルク・タタール人のアイデンティティの在り方を、

メディア、儀礼・儀式、教育、慈善活動などを通じて検証したことは、オリジナルな点と指摘できる。また、日本の回教政策に対して、旧満洲にいたディアスポラがとった政治的な対応、とくに移民の構成と組織を詳細に跡付けた点も評価されよう。なぜなら、こうした分析によって、タタール人たちの宗教儀礼や政治的な儀式が、たんに極東のコミュニティで実施されていただけでなく、ヨーロッパに逃れたディアスポラたちと共通したものであることがわかったためであり、こうしたグローバルに共通したコミュニティ活動の実態を明らかにすることに貢献できたためである。

加えて評価すべきは、本論文に添付された『ミッリー・バイラク』紙の記事カタログ、タタール人移民の名簿リストである。本論では、これらを作成する過程で見出した新たないくつかの事実を紹介している。例えば、コミュニティが関東軍に提供した資金の実態などであり、こうしたコミュニティの資金運用の一端を解明することを通じて、ディアスポラが当時の政治権力にいかなる対応をなし得たのか、その実態が明らかになったわけである。また、このカタログ及びリスト自体が、今後の学界に多大な貢献をするであろうと思われ、審査委員会からはとくに高い評価が与えられた。

○口頭試問の結果の要旨

口頭試問では、タタール語新聞『ミッリー・バイラク』紙を読破し、これに基づいて分析された第4章「北東アジアにおけるテュルク・タタール人ディアスポラの構成及びホスト国との関係について」、第5章「北東アジアにおけるテュルク・タタール各コミュニティの歴史と社会学的な特徴」の2つの章、上述したカタログ及びリストについて高い評価がなされた。

審査委員会は、こうした点を評価しながらも、口頭試問において、申請者の今後の研究の継続のために、本論文が抱える不安材料と短所を中心に指摘がなされた。

まず、全体に事実のうらにある背景説明、時代考証が荒いため、より正確さを求めたいという点である。このことは、本論文の人名・地名の表記に正確さが欠けることに特徴的にあらわれている。

また、当時の公文書や『ミッリー・バイラク』のような検閲がなされた新聞の記述と、事実との検証をより慎重になされなければならないとも発言された。こうした事実の捉え方に対して、審査委員からは歴史的事実（客観的に意義があるとされたもの）、社会学的事実（フィールドワークなどによって組み立てられたもの）、政治学的事実（解釈されたり、宣伝されたもの）の峻別に注意を払う必要があることが指摘された。また、これまでの日本近代史研究の成果をもっと取り入れるべきだとの提言もなされた。

さらに、第1章で明らかにした理論的アプローチが、それ以降の章で明らかにされた内容と十分な整合性が欠けている点も指摘された。理論にあてはまる事実を選別するのではなく、事実そのものに新たな理論の萌芽が内包されていることを意識するべきだとのアドバイスがなされた。

○最終試験結果の要旨

事実の正確な検証、理論的アプローチの再検討などの課題を残しながらも、申請者が世界で初めて『ミッリー・バイラク』紙を全面的に読破し、北東アジアのテュルク・タタール人ディアスポラの実態解明について、新たな知見を加えたことは高く評価された。

さらに、本論文が関連学界の研究の進展に貢献し得る可能性も評価された。例えば、本学が標榜する北東アジア学の創生という課題に対しては、ボルガ川流域から東アジアに移動したテュルク・タタール人ディアスポラの存在は、国際関係と地域政治や社会変動との関係を考えるうえで啓発的な事例研究だといえる。また、こうした国境を越えたテュルク・タタール人の移動に焦点を当て、戦前の大きく変動する社会のあり方を分析した点からいえば、近年さかんに議論されている国際移民の社会学にとって重要なケース・スタディになろう。さらに、タタール史研究からいえば、これまで研究が手薄だった北東アジア地域の彼らの動態を明らかにしたことは、研究史上の空白を埋める研究作業の一つになるだけでなく、すでに述べたようにグローバルな視点からタタール史を考察するうえでの貴重な成果といえるだろう。とりわけ、申請者が作成した『ミッリー・バイラク』の記事カタログや人物リストは、今後の中央アジア研究にとって重要な成果といえ、すでに東京大学から公刊される計画もあると聞く。さらに、日本近代史や中国近代史にとって、『ミッリー・バイラク』を通じて満洲国における関東軍とテュルク・タタール人ディアスポラの具体的な関係を解明できたことの意義は大きい。

こうした研究上の意義が高く評価されたことに加え、申請者が、この3年間という短い期間のうちに、日本、ロシア、アメリカ、ポーランドで発表した9編の論文あるいは研究ノート、国際学会での9回の報告などにみられる積極的かつエネルギッシュな研究活動に対しても、きわめて高い評価が与えられた。

○審査委員会の所見

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は、論文審査の結果として、本論文を社会学博士の学位を授与するに値するものと判定する。